

I C T分野の研究開発人材育成に関する研究会  
第3回ワーキンググループ 議事要旨 (案)

1. 日時 平成19年1月29日(月) 14:00~17:00

2. 場所 総務省 共用会議室3

3. 出席者

(1) 構成員(50音順、敬称略)

浅見徹(東京大学)(主査)、阿部真(株式会社国際電気通信基礎技術研究所)、井上淳(株式会社東芝)、梶浦敏範(株式会社日立製作所 代理:井上尚子)、加藤洋一(シャープ株式会社)、神崎洋(トヨタ自動車株式会社)、北村徹(三洋電機株式会社)、北村守(日本電信電話株式会社)、鹿田實(日本電気株式会社)、篠永英之(株式会社KDDI研究所 代理:石川博康)、関口潔(独立行政法人情報通信研究機構)、高橋雅則(松下電器産業株式会社)、田原俊幸(沖電気工業株式会社)、仲川史彦(YRP研究開発推進協会)、中嶋信生(電気通信大学)、松山浩司(三菱電機株式会社)、三浦章宏(株式会社富士通研究所)、横井正紀(株式会社野村総合研究所)

(2) 総務省

児玉技術政策課長、門馬技術政策課室長、平技術政策課技術企画調整官、宗政情報通信利用促進課係長

4. 議事概要

(1) 前回議事要旨の確認

(2) 議事

① I C T分野の研究開発人材に関する調査結果について

前回までのワーキンググループでの議論、及びその後の構成員の方々から意見にもとづき、アンケート調査が実施された。その調査結果について資料WG 3 - 2に基づき説明が行われた。人数等の数字については、現在集計中との説明があった。主な意見は次のとおり。

- ・ いろいろな意見がある中で、気になったのが「情熱」である。ある意味、日本のエンジニアに最も必要とされていることかもしれない。
- ・ それぞれの項目で、どのあたりの要望、必要性が多かったか分かるようにしていただきたい。

アンケート調査については、次回の会合にて数字の集計結果も含め報告されることとなった。

② 研究開発人材育成の現状と課題、在り方について

資料WG 3 - 3、3 - 4、3 - 5、3 - 6、3 - 7、3 - 8に基づき、阿部真構成員、神崎洋構成員、関口潔構成員、仲川史彦構成員、中嶋信生構成員、横井正紀構成員から、研究開発人材育成の現状と課題、それに対する方策について発表が行われた。

### ③ 意見交換

各構成員の発表に基づき、意見交換が行われた。主な意見は次のとおり。

- ・ ATRには比較的、欧州からの研究者が多くいるが、これについては特に努力して欧州各国と関係を築いてきた経緯がある。また、フランスとカナダについては協定により定期的な研究員の受け入れプログラムがある。
- ・ 研究を進めるにあたっては、そのテーマやリーダーの選定が重要となってくる。ATRにおいては、発足当初は出資者が必要とする技術テーマや、出向者がリーダーとなっていたが、2001年以降は民間基盤制度の中で、評価委員会での採択によりテーマが決まっている。また研究資金も公的資金に加え、民間からの委託も増えてきている。
- ・ 理工系離れ、ICT分野に対する学生人気の低下が言われているが、これは日本特有の現象なのだろうか。  
アジア、特に中国では、ICT分野は今まさに真っ盛りで人気が高い。日本でもICT分野の産業が、再び元気になってくれば人気が回復するのかもしれない。また一言で理工系やICT分野といっても、その利活用は非常に広がっている。欧米ではICTに関するテーマが多様化し、全体としてはそれに関わる人数は減っていないと見受けられる。
- ・ 世界を見渡すと、グローバルな活躍をしている研究者は博士号取得者である。一方、日本ではドクターコースに進学するメリットがあまりないのかもしれないが、研究者における博士号取得者はまだまだ少ない。  
今後、共同プロジェクトなどで博士課程修了者が即戦力として活躍できることを企業が認識していくと変わっていくのかもしれない。
- ・ 海外展開をしていく中で、博士号取得者の重要性は増してきており、企業の中でも博士号取得者は徐々に増えつつある。社会人ドクターの養成の必要性は大変感じている。一方、OJTベースの若手教育は様々な理由から現在、非常に難しくなっており、海外の方々を含めたいろいろな人達と交流できる場があるのは非常に大切である。
- ・ アウトソーシング先への教育というのは、会社の中に入ってきて、社内で一緒に設計・開発をする方々を対象としている教育である。こういった方々には、即戦力として来てもらっているが、本人の専門領域以外に、やはり自動車に関する全体的な技術を事前に広く浅く教育しておいた方が、業務を効率的に行えることが分かってきた。
- ・ 徒弟的な関係による技術継承については、特に生産技術の現場においては重要である。先輩、後輩がひざをつきあわせて、みっちりやっていくことの重要性が再認識されている。
- ・ 心得というのは、自分の都合だけを考えるのではなく、周りの工程を含めて、作業全体のことを考慮するというような考え方に対するものである。これまで、主に工場の技能員に対して教えてきた、「ものづくり」に対する姿勢であるが、これを開発者、研究者にも教える必要があると考え、実施している。